



報道機関 各位

熊本大学

## 熊大病院内で江戸時代の井手発見

### (概要説明)

熊本大学医学部附属病院敷地内における発掘調査で、江戸時代の「三の井手」と考えられる石垣が発見された。現在本荘を流れている水路が三の井手と考えられてきたが、江戸時代の流路が別に存在することが判明した。肥後藩主が取り組んだ治水・灌漑のための水路整備の変遷をたどるうえで、貴重な発見である。今後、現在の水路流域で江戸時代の井手が発見される可能性が出て来た。

### (説明)

#### 1 遺跡概要

熊本大学医学部附属病院の敷地は本庄遺跡に含まれ、既往の調査では古墳時代前期～中期と古代(奈良・平安時代)の集落が確認されている。

「<sup>くほんじ</sup>杵本寺」などと書かれた墨書・刻書土器や役人の帯飾りなどが出土しており、古代では一般的な集落とは異なる官衙的施設が存在したことを伺わせる。

縄文時代や弥生時代の遺物も出土するが僅かであり、弥生時代は溝のみ、縄文時代の遺構は確認されていない。近世の遺構も、素掘りの溝以外にはこれまで確認されていない。

#### 2 本荘を流れる大井手

・江戸時代初期に、加藤清正が治水・灌漑を目的として渡鹿堰を設け、大井手を引き込んだとされる。大井手はさらに3本の井手(一の井手、二の井手、三の井手)に分岐する。

築造年代は、

○慶長年間(1596～1614年(1611年?)) (本田彰男 1970『肥後藩農業水利史』熊本県土地改良事業団連合会)

○慶長 11～13年(1606～1608年) (『加藤清正の川づくり・まちづくり』熊本河川国道事務所)

とされている。

### 3 検出した石垣

**位置** (図1) 調査区は医学総合研究棟の東側、病院敷地内を北東から南西に横切る水路(暗渠)の右岸(西側)に位置する。石垣は調査区の西壁中央付近から南東方向に延びる。現在の水路からは、約3m西側に位置し、石垣の南側の延長線上は現在の水路と交わると予想される。また、北側も調査区外に延びている。検出した石垣は、位置から推定して「三の井手」と考えられる。

**石垣** (写真1、2、図2) 石垣は、安山岩製の間知石<sup>けんちいし</sup>を布積みしていたと考えられる。玉石(10×15cm程度の楕円形の石)を裏込めに利用しており、溝状に掘削し壁と間知石の間に詰めて粘土で固定している。現況は、間知石20個、約7.5mを確認している。調査の結果、これが最下段の石積みと判明した。本来は少なくともあと5~6段は積んでいたと想定される。現在の水路の底が標高約8.9m、発見された三の井手の底は標高約8.3mで、三の井手のほうが60cm深い、ほぼ同程度の掘削深度である。

石垣の面<sup>つら</sup>は西側、控え<sup>ひかえ</sup>・裏込めが東側となるよう配置されていることから、左岸の石垣に相当し、右岸の石垣は調査区西側外に位置すると考えられる。

**間知石** 石垣に積まれた石は、一尺(約30cm)四方の面をもち、長さは一尺半の控えをもついわゆる「間知石」である。検出した間知石の控えは、四角錘にはなっておらず、上下を削って扁平にし、両脇をやや削って幅を細くしている。四角錘の控えを持つ間知石への変化の途中の形態である。このような特徴から、江戸時代中期以降のものと考えられる。

**時期** 間知石は江戸時代初期には存在しないことから、この石垣は加藤清正が築造したという江戸時代初期のものではない。間知石の登場は、江戸時代中期以降とされており、加藤清正(江戸時代初期)が築造したとされる時期と、今回検出した水路の石垣(江戸時代中期以降)には年代的な隔りがある。これらのことから、三の井手は江戸時代の間にも改修された可能性が高い。

### 4 発見の意義と課題

- \* 現在の水路とは別に、江戸時代の三の井手の遺構があることが確認・認識されたことにより、今後、現在の水路の流域でも江戸時代の三の井手の遺構が発見される可能性が浮上した。近辺における工事や調査時には留意が必要である。
- \* 検出した石垣は、加藤清正が築造したとされる時期とは約100年の年代的なズレが生じている。この点については、三の井手が江戸時代のうちに改修されたことを示す。

本調査区において確認した石垣は最下段であることから、築造当時の石垣は残されていない。この点については、

- ①江戸時代に行われた改修は、全面的なものであった。
- ②改修の程度は、長い流路のなかで場所によって違い、他の地点では部分的な改修であった可能性もある。
- ③今回検出した水路は、築造当時（江戸時代初期）の三の井手とは、別の水路である。江戸時代にも流路の変更があった。
- ④築当初は、石垣を作らない素掘りの溝であった。（大正 14 年（1925 年）4 月 19 日に落成式を迎えた、加藤清正の石塘堰の改築では、築造時の石垣を確認しており、当初から石垣築造である。三の井手も築造当初から石垣構造である可能性が高い。）

\* 改修の方法が、上記②であった場合には、今後別地点において同様の遺構が発見され、下部に残された築造当時の石垣を確認できる可能性がある。もし発見されれば、築造当時の石垣の様相を把握でき、また、石垣の改修や技術変遷を追ううえでの好資料となる。

\* 江戸時代に三の井手が改修された、また現在の水路が掘削された理由・背景と変遷の解明が課題である。

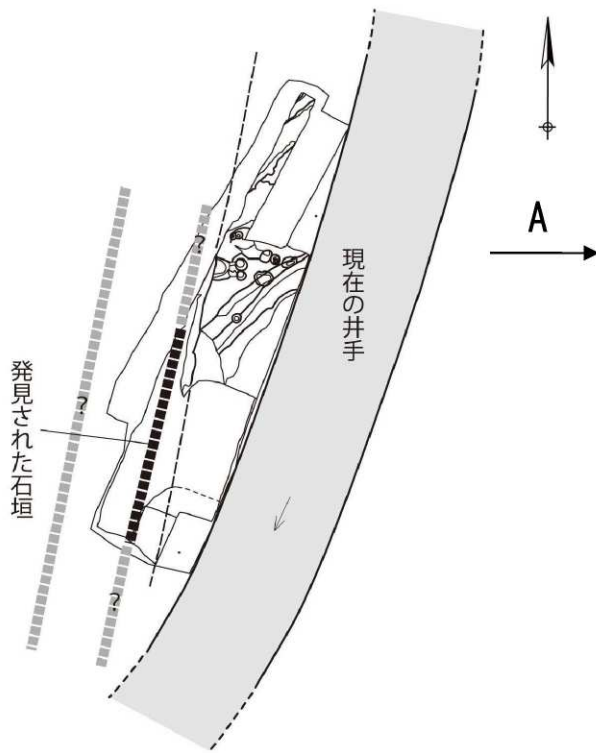


図1 1321 調査地点 XXX 区遺構配置図



写真1 石垣検出状況（南から）



写真2 石垣検出状況（東から）

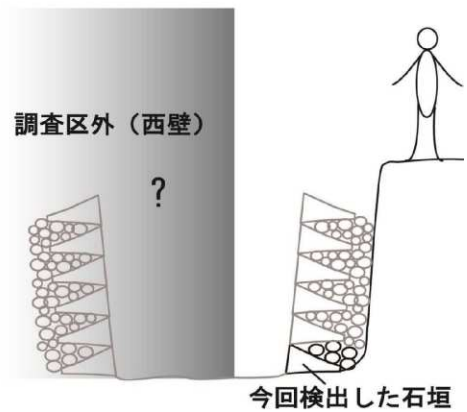


図2 石垣検出状況模式図（断面）

## 【お問い合わせ先】

大坪 志子 （オオツボ ユキコ）  
熊本大学埋蔵文化財調査センター・助教  
電話 096-342-3832 Fax : 096-342-3832

※日中は発掘調査のため現場に出ていますので、出来るだけ  
下記メールアドレスにご連絡下さいますよう、お願いいたします。  
E-mail : ter12tar@gpo.kumamoto-u.ac.jp